

〈性の博物館〉としての『風に紅葉』

はじめに

中世王朝物語に属する『いはでしのぶ』や『我身にたどる姫君』には密通という〈性〉に関わる描写が多出するわけだが、『風に紅葉』ではそれがどのように語られているのだろうか。

その『風に紅葉』は分量からすれば、それほど大部のものではなく、いわば中編物語に属するものと考えられるが、主人公公大将（後に内大臣となるが、以下、大将と称する）と帝（後に朱雀院）の女御たちをはじめとする高貴で年上の女性たちとの密通が随所で語られているばかりではなく、大将の亡き異母兄の若君（以下、遣児若君と称する）との〈同性愛〉が頻繁に繰り広げられており、いわば〈性の博物館〉のごとき様相を呈しているといってもよいだろう。

このように〈性〉に照射していくと、大将と高貴な女性たちとの密通とは別に、中宮（大将の父親関白の妹で、叔母。大将の正妻一品宮の母親。後に皇太后宮・女院）への大将の出入りが帝によって禁じられていることが、三個所にわたって語られているわけだが、そこにどのような意味が内包されているのだろうか。その点を中心に論じていこうと思う。

大倉 比呂志

一
大将が中宮のもとに出入りすることを帝によって禁じられた部分は三個所あり、それらは、

①この（一品宮ノ）御さまをも中宮の常にも見きこえ給はず、うとうとしきを、
大将は、などかくはおはしますぞ。心つけ顔に上（帝）の（中宮ト大将ノコトヲ）
思ひ疑ふなるぞをかしき。思ひ寄るほどのことかは。七、八ばかりにて童殿
上して参り給へりける折、つくづくと目離れなくまもりきこえ給へりけるを、
上の御覧じて、「心のつかんまに、誰がためもよしなし」とて、（中宮ヘノ）
御入り立ちは放たれ給ひにけり。その後は、（中宮ノ）御衣の裾よりほかに見
きこえ給はず。（一・三四）

②「なにがし（注―大将）は幼くて、中宮をつくづくと見きこえたりけるにこそ、
『行く末推し量らる』とて、長く（中宮ヘノ）御入り立ちは離れきこえたれ。
この有様（注―遣児若君が宣耀殿女御を凝視したこと）、春宮の御前にて人々学び
きこえ給ふな。いかにも悪しく思さんぞ。されど、これ（遣児若君）は（女御
ト）御同胞なれば（注―大将の意向で、表面上は女御と遣児若君とを異母姉弟として

いること。大臣（父親関白）は中宮にもさて（注一 関白と中宮とは兄妹）こそおはすめ。なにがし（注一 大将）が一つ隔てある身になりて、もの狂ほしく、御子と同じほなるものを、思し疑ふ上の御心こそけしからね。されど、げにすぐれ給ひなん人（注一 美しい女性）は、見ん人（注一 世話をする夫）苦しかるべし」とて、（女御ヲ）うち見やりきこえ給へば、……（一・四八）

③（モトノ帝ヲ現在ノ朱雀院ハ）皇太后宮（注一 もとの中宮）の御あたり、例の雲居はるかにもてなさるるを、（大将ハ）いとし、と思しつつ、女宮（一品宮）に「かやうになれば、さもありぬべきこと（注一 これほどまで隔てられると、逆に密通が生じて不思議ではないこと）からと、心も尽きておぼゆる。同じくは、さらばこのほどに（モトノ中宮ノモトニ）導かせ給へかし。（モトノ中宮ハ）御鏡の影（注一 鏡に映る一品宮の姿）に似きこえさせ給へりや」など（大将ハ）のたまひゐたれば、……（二・五八）

と語られている。

①では七、八歳だった大将が中宮を凝視したために、帝は大将が中宮を恋慕しているのではないかと懸念し、将来における密通の可能性を危惧して、中宮への出入りを禁止したと語られている。ちなみに点線部は大将の心中思惟と考えられるが、中宮と大将について帝が過剰に反応していることに對して、大将が批判的にとらえているのであり、それは不滿意識を表出させたものであろう。②は大将の妹で春宮（後に帝）の宣耀殿女御（後に弘徽殿中宮）が遣児若君の眉作りをした際、女御の手をなめ回した後に、大将は①と同様の内容を女御に語ったという記事である。③は大将と一品宮との間に生まれた姫君が五歳となり、袴着が行なわれた際、かつての帝は朱雀院と称され、中宮も皇太后宮になっているわけだが、院は昔と同様、

大将が皇太后宮に接近するのを阻止しようとしていることを大将が一品宮に語っている件である。②は①で語られたことの繰り返しであり、それは両者の傍線部と波線部における類似した表現によって理解されよう。とすれば、同一内容が繰り返されているのは、大将の根底で不滿意識が表出されていると考えるべきではなからうか。さらに③において、大将の中宮への出入り禁止は帝の退位後にまで及んでいるのであって、そこに帝の大将に對する並々ならぬ警戒心を看取すべきだろう。というのは、大将の父親は初元結の時に、「古き大臣の御女」（一・一一―一二）と結婚したものの、八年ほど経過して、帝の同母妹である女一宮を盗んだ結果、生まれたのが大将であったことから、父親の血筋を受け継いでいると考えられる大将を帝は警戒したと考えられるからである。だからこそ、帝は父親関白の女一宮盗み出しに懲りて、大将の元服時に、先取りして娘の一品宮と結婚させたのだ。

ところで、例えば「限なうおはしまして、采女が際までも、容貌をかしきをば御覧じ過ぐさず」（一・一四）とあるように、帝は〈好色者〉であるが、中宮に對する愛情は特別なものであると語られている点からすれば、帝は中宮といういわば聖域に自分以外の男が足を踏み入れるのを拒絶しているのだ。このことは光源氏が息子夕霧を紫上に接近させようとはしなかった点と軌を一にしていよう。ちなみに、帝が退位して院になった後までそのような危惧を持ち続けていることに對して、大将は内心では二重傍線部「いとし」と不快感を抱いていたと語られている。ではなぜ帝（院）は大将が中宮（皇太后宮）に接近することに神経を尖らせているのだろうか。例えば桐壺巻で更衣が亡くなった後、入内した先帝の四宮藤壺の局に桐壺帝が元服前の光源氏を同伴した結果（さすがに光源氏が元服後には、桐

壺帝も光源氏を藤壺の所には連れて行っていないが、やがて密通が生じたようなことは帝にとって容認できなかったのではなからうか。^{注①}だからこそ、大将と中宮との密通を回避するために、帝は細心の注意を払って、強力に大将の中宮への出入りを禁止したのではなかったか。帝には桐壺巻が生じたような危険な状況を回避しようとする強い意志が作動したのだ。

大将に対する帝のこのような厳しい拘束があったからこそ、結果的に大将は梅壺女御（後に中宮・皇后宮）並びに承香殿女御という帝の二人の妻たちの〈性〉を獲得することになったのではなからうか。もちろん、二人の女御たちは自分たちの方から接近していった〈女すすみ〉^{注②}ではあるわけだが、大将は二人の女御たちを拒絶することはなく、女御たちから提供された〈性〉を受け入れたのだ。このように①から③までに語られている叙述は、帝の大将が中宮のもとに出入りするのを禁じた措置に対する大将の不満意識が表出されたものと考えられるが、それは二人の女御との〈性戯〉に脈絡しているのではなからうか。すなわち、それは中宮への出入りを禁じた帝に対する〈報復〉^{注③}ではなかったか。あるいは、中宮との不可能な密通への〈代用〉だったのではなからうか。大将に対する女御たちからの積極的な姿勢は、

④ 有明のつれなき影に先立ちてまた夕闇の心惑ひよ

とむせかへり給ふ（梅壺女御ノ）御気色も、逆様事なり。（1・二八）

と先に梅壺女御の方から大将に贈歌し、また、

⑤（大将ハ承香殿女御ノコトガ）心に入れずは見えじ、と折を過ぐさず（女御ヲ）訪れなどはし給へど、（大将ノ女御ニ対スル愛情ハ）こなた（注一女御）の御心ざし

の十が一だにあらじとぞ見ゆる。（1・三二）

と語られているように、二個所の傍線部から二人の女御たちの大将に対する積極性を窺い知ることができよう。その点からも女御たちの方からの大将への〈性〉の提供が看取されるべきであって、それは〈女〉の側からの〈性〉の贈与だったのだといえよう。

一方、大将の妹宣耀殿女御一人だけに愛情を注ぎ、他の女性たちには目もくれない春宮に関してはどのように語られているのだろうか。宣耀殿女御が再度の懐妊後、重態に陥ったために、大将は観想にすぐれ唐から渡来した聖を招請する目的で、難波に下向し、亡き異母兄の遺児若君を異母弟という触れ込みで、彼を連れて帰京した後、遺児若君が女御と対面した時のことは、

⑥（遺児若君ノ）幼心地にも、女御の御さまの、日頃人にすぐれてうつくしう懐かしと見きこえつる宮（一品宮）よりも、なほ目もあやなる（女御）を、つくづくとまもりきこえ給ふを、……（1・四二）

と語られている。傍線部は例文①②と類似した表現であり、大将が中宮を凝視したのと同様に、遺児若君も宣耀殿女御を凝視したのである。そこに遺児若君の女御への恋慕が想起されるが、遺児若君の女御に対する傍線部の行為は春宮に伝えられることもなく、物語の展開上大きな役割を果たすこともない。

ところで、春宮には宣耀殿女御の他に、麗景殿女御（太政大臣の娘で、梅壺女御と姉妹）も入内しているが、大将と関わる記事はなく、また、帝と兄弟関係にある前斎宮は大将を恋慕するものの、「手当たりもあまりやせ

やせにさらばひ」(2・六一)て、『(前斎宮が)御車より降り給へりし折、思ひあへず見たてまつりたりし、墨絵のやうにて、うつくしうもおはしまさざりし』(2・六二。遺児若君の大将への発言)と語られているごとく、大将にとって魅力に乏しいが故に、〈性〉の対象とはなりえず、二人の間には〈性〉の関係はなかったのである。とすれば、前述した梅壺女御と承香殿女御という帝の二人の女御たちの大将に対する恋慕と〈性〉の提供は看過しがたく、いわば帝の領有する二人の女御たちとの情事が語られている点に注目すべきなのだ。それは前述したごとく、中宮への出入りを禁じられた大将の帝への〈報復〉という視点から考えていくべきではなからうか。大将の二人の女御たちとの密通は、大将にとっては愛情の問題ではあるまい。大将に二人の女御たちを積極的に駆り立たせ、彼女たちの大将への強烈な恋慕を利用して、結果的に〈性〉を提供させたところに、大将の帝に対する〈報復〉を果たそうとする力学が働いているのではなからうか。

以上のように、一見穏やかに見える帝と大将との関係の根底には両者の眼に見えない緊張関係が内包されているのであり、大将と中宮との密通の可能性に対する帝の執拗な危惧とそれに対する大将の〈報復〉が語られているといえよう。二人の女御たちの大将に対する強烈な恋慕をてこにして、彼女たちの方から大将に〈性〉を提供させたところに、大将の帝への〈報復〉が企図されている。これら二人の女御たちの大将への〈性〉の提供は秘密裡に行なわれたとはいえ、ほとんど問題にされることもなく、梅壺女御に太政大臣という後見勢力が作用したとしても、中宮という後の最高位に達するわけだから、女御時代の密通は問題視されなかったのではない^{注④}。このような〈性〉の氾濫は、『風に紅葉』とほぼ同時代に成立したと考えられる『とはずがたり』にも顕著であって、それが中世という時代

のひとつの特色なのだともいえよう。

ここでもうひとつ考えておかねばならない問題がある。幼い大将の中宮への出入りを禁じるという帝の措置には、他者に中宮の〈性〉を領略されたくはないという帝の強烈な思いがあったとしても、それは帝の大将に対するいわば一種の〈いじめ〉であり、大将の二人の帝の女御たちとの〈性戯〉は帝に対する〈報復〉であると考えられるとするならば、本作品には〈いじめ〉と〈報復〉という要素が内在化されているのであって、根底には変形された〈継子譚〉の話型がちりばめられているといえるのではなからうか。さらに、〈いじめ〉という視点に立脚すれば、大将が承香殿女御の実家に立寄り、垣間見たところ、「火をつくづくとながめて、いともの思はしげなるまみのわたり、あはれに懐かしう、らうたげなること限りな」(2・六五―六六)い姫君に注目した結果、大将は恋慕して、情交に到った故式部卿宮の姫君との関係を考えねばなるまい。姫君の異母姉で〈女すすみ〉の承香殿女御が二人の関係を聞き知り、嫉妬して、姫君を追放し〈いじめ〉、その嚴重な管理を委託したにもかかわらず、被委託者の恩情によって姫君は監禁されることはなく、東山の尼君を頼って三輪に移居したために、姉の〈いじめ〉から逃れることができたのは、姉に対する一種の〈報復〉と考えられはしまいか。とすれば、『落窪物語』における継母の継子に対する〈いじめ〉と継母への〈報復〉とは形態を異にしてはいるものの、その根底には〈いじめ〉と〈報復〉という構造が内在化されているのではなからうか。

二

大将は加行のために、一品宮の一人寝の状態にならざるをえない点を憂

慮して、遺児若君に一品宮の〈性〉を提供する。遺児若君は内心では一品宮に魅せられながらも、最初は拒絶するわけだが、次第にその虜になって、一品宮と情交を重ねることになる。ここにおいても、大将から遺児若君に対して〈性〉の贈与がなされているのである。

また、〈性〉の贈与の一例として、一品宮が遺児若君の子を出産し、逝去するわけだが、その後、大将の父親関白の『「今宵、女房のそばにおはしまさぬは忌むこと」』（2・九九）という意向で、〈精進落とし〉の意をこめて、^{注⑥}大将に故帥宮の姫君の〈性〉が提供されるが、大将は断わる。その後、姫君は大将から遺児若君に贈与された後、「姫君ハ」様々思ひ結ばれ給ふけにや、心地もかきくれ、世に長らふべくもなく見え給」（2・一四）うたので、修学院に参籠していたところ、太政大臣の息子按察使大納言（もとの左衛門督）に盗み出されて、^{注⑦}物語は終結する。

このように随所で〈性〉の贈与が語られているわけだが、大将が一品宮と結婚した後、伯父の太政大臣から梅見の宴に誘われる。その時の太政大臣の詞は、

⑦「翁（注―太政大臣）、むげに近づきたる心地しはべるに、この人（注―北の方との間に生まれた小姫君）のむつかしきほだしにおぼえはべる。ものめかさばこそ世の聞こえも便なうはべるらめ、ただ候ふ人の列にて育ませ給ひなんや」と聞こえ給へば、……（1・二〇）

とあるように、太政大臣から大将に小姫君の提供が申し出される（後に、小姫君は遺児若君に譲渡され、二人は結婚する）。その後に展開される酒宴の場面は、

⑧「御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と、大臣の上（北の方）に聞こえ給へば、居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将居直りて、色許りて見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」とのたまへど、（北の方ハ）なほ押さへて奉り給ふを、「さらば、また」とて、受け給ふほどの（大将ノ）御気色、（北の方ハ）ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。大臣の盃取り給ふ折、（北の方ハ）うち置き給へば、大納言の君と呼ばるるぞ奉る。^⑨大臣は例の我しもとく酔ひ給ふ癖にて、「むげに無礼にはべり」とて入り給ひぬれば、……（1・二〇―二二）

とあり、傍線部⑨において太政大臣が退席したことが語られている。それは『源氏物語』藤裏葉巻で夕霧が内大臣（もとの頭中将）から自邸で開催する藤の宴に招待され、赴いたところ、長年にわたって実現しなかった雲井雁との結婚を内大臣が許す件は、

⑨大臣、「朝臣（注―内大臣の長男柏木）や、（夕霧ノ）御休み所もとめよ。翁（注―内大臣）いたう酔ひすすみて無礼なればまかり入りぬ」と言ひ捨てて入り給ひぬ。

と語られており、例文⑧の⑧と⑨の傍線部とが酷似している点から、⑨が⑧に影響を及ぼしたと指摘されている。^{注⑧}すなわち、両作品において太政大臣と内大臣は自身のことを「翁」と称しており、大将は太政大臣から自邸で開催する梅見の宴に招待され、出かけたところ、太政大臣が酔いを理由に退席した後、大将と北の方との間で〈性戯〉が繰り広げられることになる。それは、内大臣が酔いを理由に退席した後、内大臣から結婚を許された夕霧と雲井雁は〈性戯〉に耽り、夜の「明くるも知らず顔なり」という状況と酷似しているのだ。とすれば、太政大臣の退席は大将と北の方との

密通を黙認するという太政大臣の暗黙の了解が語られているのではなからうか。両作品の要点を簡単に図式化すると、藤裏葉巻は、

① 内大臣が自邸における藤の宴に夕霧を招待

←

② 内大臣は自身を「翁」と称して、酔いを理由に退席

←

③ 夕霧と雲井雁の結婚許可

←

④ 二人の〈性戯〉への耽溺

となる。一方『風に紅葉』においても、

① 太政大臣が自邸における梅見の宴に大将を招待

←

② 太政大臣は自身を「翁」と称して、酔いを理由に退席

←

③ 大将と北の方との密通を黙認

←

④ 二人の〈性戯〉

となり、藤と梅の差異があるだけで、話筋は極めて酷似している。

ちなみに、太政大臣は「すでに六十に及び給ひぬる」(2・五三)とある

一方、北の方は「二十六、七にやと見ゆる」(1・一九)とあって、二人の

年齢差は少なくとも三十は下らないと考えられ、当時の年齢感覚からして、

太政大臣は後期高齢者もしくはそれ以上の段階(死亡予備軍)に属する年

齢であって、傍線部⑨によれば、太政大臣は酒に早く酔う癖があるためにこの場を退席する旨を語っており、結果的には北の方の〈性〉が大将に提供されたことになる。太政大臣は酔いを理由にその場から退席したために、大将を恋慕している北の方にとっては邪魔者がいなくなったのである。情事の比喩である「女」という語が「男」よりも前に北の方に用いられ、④に表象されているごとく、北の方は大将に積極的で、「酔ひ少し進みぬるまめ人」(1・二二)である大将も〈性〉への欲望を抑制できなかったのか、大将と北の方との間で〈性戯〉が繰り広げられる。それ故に「姫君(小姫君)の御新枕にはあらで、あやしの乱りがはしさや。あさはかにとりあへざりける御契りかな」(1・二二)と草子地の形で揶揄的に語られているのだ。その後、太政大臣から大将に贈られた手紙への返事は次のように記されている。それは、

⑩

大臣にも嬉しかりし御もてなしのやう、行く末の御後見おろかなるまじきよしなど聞こえ給へる(大将ノ)御返り、そぞろに喜びきこえ給へるをかし。

⑪

(1・三二)

とあり、傍線部⑩では太政大臣が早く寝てしまったために、北の方と大将との間で〈性戯〉が繰り広げられたことが皮肉を混じえて記されており、⑪では前述の例文⑦への返答として小姫君への誠実な世話を約束するという旨が語られていることに対して、⑫で太政大臣の過剰なほどの礼が述べられていることに、「をかし」と語られている。これは大将の心中とも草子地とも受け取れるが、いずれにせよ、北の方のことに關して何も知らない間抜けな太政大臣が笑いの対象として語られていることになる。

このように巻一の起筆後間もなく話筋が〈性〉に照射されているのであ

って、本作品の今後の行方が予想されるような展開がなされているといえよう。

三

大將は太政大臣から世話を依頼された小姫君、正妻一品宮、一品宮死後に父親から提供された故帥宮の姫君の三人の女性たちを遺児若君に譲渡、もしくは彼女たちの〈性〉を提供するわけだが、故式部卿宮の姫君だけは例外であり、大將は遺児若君に彼女との恋の経緯に関して語りはするものの、譲渡しようとはしないのだ。もちろん、この姫君が大將と出逢って短期間で行方不明になってしまったという特殊事情もあるが、今までの女性たちは大將に与えられたり、女性たちの方から大將に恋慕したのとは異なり、大將の方から先に恋慕した例外的な女性であって、他者に譲渡するつもりは皆無で、大將は姫君の〈性〉を独占したかったからだと考えられる。^{注⑨}そのことは前述したごとく、帝の中宮に対する場合と類似しているよう。

ところで、大將は里下り中の承香殿女御を訪れた際、「例は人住むとも見えぬ西の対（注一院が女御の異母妹である姫君を恋慕したので、女御が不快感を催して姫君を隔離している住まい。なお本文では、大將から姫君の素性を尋ねられた女房が『去年のこの頃より、煩はしきこと出で来はべりて、（姫君ハ）かく離れた方になんおはします』（2・七〇）と答えている）の方に、箏の琴をわざとならず弾きすさむ音、なべてならず聞こ」（2・六五）えたので、興味を示し、垣間見したところ、恋慕してしまい、情交に到る。その直後、大將が姫君を迎える隠れ家の準備が整ったので、訪ねてみると、姫君は既に行方不明になっていた。大將を恋慕し、密通関係にある承香殿女御が二人の関係を知って、姫君に立腹し、追放したのだ。とすれば、大將の垣間

見↓姫君への恋慕と情交↓姫君の行方不明という話筋は何を物語っているのだろうか。大將の方から姫君を恋慕するという展開は「まことの恋の道」（2・七八）であり、このことは光源氏が紫上を発見した状況を下敷きにしているのではなからうか。若紫巻で光源氏は瘡病の治療のために北山の聖を尋ね、そこで恋慕している藤壺に類似する紫上を垣間見た結果、その虜となって、求婚するが、紫上が幼少だという理由で断わられ、母亡き紫上を養育していた祖母尼君の死後、紫上が父兵部宮邸に引き取られる寸前に、光源氏は自邸に盗み出すのである。以上のごとく、この故式部卿宮の姫君に関する件は若紫巻の話筋を下敷きにしたものと考えられる。

ちなみに、故式部卿宮の姫君と兵部卿宮の娘である紫上は、宮家の姫君であるという共通点もさることながら、大將と光源氏が垣間見して恋慕した姫君であるという類似性を持っており、特に姫君は大將の方から接近した唯一の女性であって、それは光源氏最愛の伴侶となった紫上に該当するのではなからうか。^{注⑩}

一方、幼少の大將が叔母中宮に釘付けになったことと、光源氏が亡き母親桐壺更衣と類似している藤壺を恋慕し続けたことには共通性があり、藤壺の入内時の地位は不明だが、紅葉賀巻で「中宮」^{注⑪}となっており、結果的には二人とも「中宮」の地位に就いたことになる。以上の点から、中宮と藤壺の二人の女性たちの共通性は、いわば人妻であり、「中宮」という后位に就いているということである。前述したごとく、故式部卿宮の姫君と紫上との相似性はもちろんのこと、中宮と藤壺との間にも相似性の関係が考えられるのではなからうか。『源氏物語』において光源氏が恋慕したのは主要な女性登場人物の中で藤壺と紫上であり、それはいわば〈ゆかり〉の系譜に位置する女性たちであるが、『風に紅葉』ではそのような系譜は

関係なく、大将の方から恋慕した女性たち（中宮と故式部卿宮の姫君）の造型には、根底で藤壺と紫上とが下敷きにされているのではないのか。ただし、藤壺は光源氏と密通する関係になったが、大将と中宮との間では大将の恋慕だけに終始したという差異があり、その点からすれば単なる下敷きではなく、大将にとって中宮とはいわば永遠の処女なる存在であった点に留意する必要があるう。

おわりに

今まで述べてきたように、『風に紅葉』においては『とはずがたり』と同様、〈性〉が充満しているのであるが、それを密通という視点からだけではなく、〈性〉の贈与もしくは〈性〉の提供という視点からも考えていく必要があるのではなからうか。その場合、物語に多く見られるごとく、女房による密通の仲介ではなく、太政大臣が北の方を間接的に大将に、大将が一品宮を直接的に遣児若君に、彼女たちの〈性〉を提供するという点において、^{注⑩}太政大臣と大将が関わって自分の正妻の〈性〉を公然と甥という近親者に提供するという特異な状況が語られている。さらにその特異性は、大将と〈性戯〉の関係にある北の方が、大将を恋慕する継子の梅壺女御に、大将と〈性戯〉の関係になるように斡旋する件にも顕在化しており、その場合、大将をめぐって承香殿女御が異母妹に嫉妬して追放したのとは異なり、北の方には梅壺女御に対する嫉妬は微塵も語られていないのだ。^{注⑪}このように従来とは異なった〈性〉のあり方が語られようとしたのが、『風に紅葉』における新機軸であったのではなからうか。それ故に、『風に紅葉』を簡潔に理解できるように、題名に〈性の博物館〉と名付けた次第である。

* * *

『風に紅葉』の本文は、鈴木泰恵との共編著『校注 風に紅葉』（新典社 二〇一二・10）により、算用数字は巻、漢数字は該当ページを示す。『源氏物語』―新編日本古典文学全集。なお、本文の一部を私に改訂した箇所があることを御断わりしておく。

注① 光源氏が夕霧を紫上に近付けないようにしたことと同様な考えを持つ帝とは対照的に、元服前の光源氏を桐壺帝が藤壺のもとに連れて行ったことと同様、大将が遣児若君を一品宮のもとに連れて行ったことが語られている。大将の行動は特に異常なものだとはいえないが、巻二で大将が正妻一品宮の〈性〉を遣児若君に贈与したことに關して、既に巻一で「終の果ていかがあらん。例のささしかるらん。この草子のと」（1・四三）と将来のことが草子地の形で予見されている。

② 〈女すすみ〉に關しては、大倉『物語文学集攷―平安後期から中世へ―』第二部の「二十一」（新典社 二〇一三・2）を参照されたい。

③ 〈報復〉に刊しては、かつて神田龍身『『なぜに紅葉』考―少年愛の陥穽―』（^{今井章爾博士}喜寿記念源氏物語とその前後）に所収 桜楓社 一九八六・5）が遣児若君の登場の意味と関連させて、次のように述べている。かなり長くなるが、要点のみを引用すると、

（私云、大将ノ）最大の愚行は、妻一品の宮の寝所にこの少年（その時は既に成人していたが）を手引きしたということであらうか。聖の不吉な予言もあり仏道修行中の身であった彼は、妻の空閨を慰めてやるために二人の結びつきをはかったということなのであるが、なんとしても不可解な行為と評しざるを得ないのである。しかもこのことにより、最愛の妻一品の宮の愛をも失ってしまったのである。かくして一品の宮は少年の子をも孕み、その出産の

痛手のために夫を恨みながら亡くなってしまふのであった。……彼は出家を決意するやいなや、家のみならず自らの司・位をも放棄するのであるが、その際にもあろうにかかる社会的榮譽の大半をこの少年に託してしまふのである。というよりも、そこにいたるまでの原因総てが少年にあると考えられる以上、妻一品の宮をも含めて総てをこの少年が乗っ取ってしまったのであると表現した方がより正鵠を射ているのではないかとまで思われるのである。そして事実、彼は身ぐるみ剥がれた主人公に成り代わって俄然動きだすのである。そもそも太政大臣家の小姫宮との婚儀にしても主人公の代わりということであつた訳であるが、物語終末、元来主人公にすめられてあつたはずの故帥の宮の姫君とも、巧みに主人公に成り代わって逸速く契りを結んでしまふのであつた。……（私云、遺児若君ハ）実はこの異腹の兄権中納言の隠し子であつたからに外ならないからである。……この美少年による乗っ取りという事態を家レベルの問題へと翻訳し直すならば、暗い運命のもとに悲憤のうちに悶死した故大臣の娘とその子権中納言一派の、主人公一派に対する完璧な復讐を意味しているということになるからなのであつた。

となる。神田は『風に紅葉』における遺児若君の登場を二重傍線部「主人公一派に対する完璧な復讐を意味している」と家の問題と連動させながら、「復讐」という視点による斬新な解釈を提示したことは大きな功績ではあるが、傍線部のように解せるかどうかは疑問である。というのは、大將が遺児若君を一品宮のもとに導き入れようとしたものの、最初、遺児若君はその申し出を拒んでいるのであって、遺児若君には一品宮の〈性〉を略奪しようとする意識はなかったものと判断されるからだ。したがって、遺児若君の登場を故権中納言家の復興の問題と短絡的に連動させるべきではないとかつて述べたことがある。大倉注②前掲書第二部の「三八」。これより以前に、神田論文に対する批判として、河野千穂「物語『風に紅葉』主題

論」（『日本文学』三十二号 一九九五・12）がある。

④ 例えば『我身にたどる姫君』において、複数の女御の密通が語られており、特に後涼殿女御にあてた宮の中將の恋文を三条帝が眼にしたにもかかわらず、密通した女御が中宮になっている例からも、女御時代の密通はさほど大きな問題とはならなかったと考えられる。あるいは后と密通した男に対して、帝が強権を発動できないほど弱体化したのではないかと推測される。だが『夢の通ひ路物語』では、岩田中將の兄である岩田大納言は今亡き藤壺女御を恋慕して、恋文を大式内侍に託したところ、内侍がその恋文を打橋に落としてしまったために、それを按察使大納言女の麗景殿女御が発見し、後宮世界における競争相手を陥し入れる目的で、父親に報告した結果、宿直の任に当たっていた岩田中將に嫌疑がかかり、播磨国に流罪となる。いわば岩田中將は濡れ衣を着せられたわけだが、岩田中將はそれに一言も弁解せずに、兄の代わりに流罪となったので、兄は良心の呵責に耐えられず、塗籠で自死を遂げたという点に着目すれば、そこに本物語とは異なった強い帝を想定する必要がある。このように強い帝を押し出した作品も存在したのである（ただし、『風に紅葉』と『夢の通ひ路物語』との成立の前後関係は、現存のところ、明確にしがたい）。

⑤ 詳しくは大倉注②前掲書第三部の「三」を参照されたい。つとに、市古貞次「『なぜに紅葉』について」（『中世小説とその周辺』に所収 東京大学出版会 一九八一・11。初出、一九五九・5）は、『とはずがたり』において後深草院が寵愛した二条を他の男に契らせるように仕向ける件は、『風に紅葉』で大將が遺児若君に正妻一品宮と契るように誘導する件と一脈通じるものがあると指摘している。なお、辛島正雄も「校注『風に紅葉』―巻二―」（『文学論叢』三十七号 一九九二・3）において、一品宮と遺児若君との関係は、大將の監視・指導のもとで行なわれ、『とはずがたり』巻三における二条と「有明の月」（性助法親王）との関係が、後深草院の監督下で行なわ

れているのを想起させると述べている。

- ⑥ 大倉『『風に紅葉』における〈精進落とし〉の記事をめぐっての断章——『源氏物語』撰取の新たな技』（井上真弓他編『狭衣物語 文の空間』に所収 翰林書房 二〇一四・五）。詳細は第三章を参照されたい。

- ⑦ 卷一冒頭部で関白が宮中から女一宮を盗み出し、卷二巻末部では修学院に参籠中の故帥宮の姫君が按察大納言によって盗み出されたという点から、本作品は首尾照応していると考えることができよう。さらに北の方は、大将との〈性戯〉が開始される前には、継子にあたる按察使大納言（当時は左衛門督）と密通関係にあったが、大将の出現後は北の方を寝取られたために、大納言は悔しい思いをしたものの、我慢していた。一品宮の死後、故帥宮の姫君は最初大将に与えられようとしたものの、大将の拒絶にあい、遺児若君に譲渡されたが、大納言はその姫君を盗み出すことによって、かつて北の方を寝取られたことへの〈報復〉を果たしたとも解釈できる。
- ⑧ 辛島正雄「校注『風に紅葉』——卷一——」（『文学論叢』三十六号 一九九〇・12）。

- ⑨ 一品宮が遺児若君の子を懐妊したために、「（大将ハ）今は宵の間のうたた寝の歩きだにし給はず、ただ起き臥し（一品宮ト）もろともに過ごし給ふ中にも、雪踏み分けし人（故式部卿宮の姫君）のあはればかりは、（大将ノ）御心の底に残りけり」（2・八八）と語られている。行方不明になった姫君は傍線部のごとく、大将にとって恋慕の対象であり続けたという点で、姫君は大将の永遠の恋人であったことが強調されている。

- ⑩ 紫上を下敷きにした人物造型として遺児若君が考えられる。大将と遺児若君との初対面の折、遺児若君は「十一、二ばかりなる人の、白き衣に袴長やかに着て、髪の裾は扇を広げたらんやうにをかしげにて」（1・三九）と語られており、それは若紫巻で光源氏が北山で初めて紫上を垣間見た際に、「十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り

来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり」とあって、両者の傍線部から遺児若君の造型にも紫上の影響を受けていると考えられる。

- ⑪ 中宮と記す場合は大将の叔母である中宮を示し、「中宮」とした場合には後の位を示すものとして、両者を区別した。

- ⑫ 太政大臣の場合は、大将が一品宮の〈性〉を遺児若君に贈与したように直接的ではないが、大将と北の方との情交が成立しやすい雰囲気を作り出している点から、結果的には太政大臣が間接的に二人の情交の〈場〉を提供したと考えられるのではなからうか。

- ⑬ 「殿（注一太政大臣）の内のやう癖々しからず、あまりなるまで直面にて、（梅壺女御ハ）継母の上ともいつとなう一つにのみ戯れきこえ給ふほどに」（1・二三）とあるように、北の方と梅壺女御とは継母と継子の関係ではあるが、仲の良い関係を保っていると語られている。その点からすれば、『落窪物語』のように実娘と継娘が存在して、継母が継娘に〈いじめ〉をもたらすという従来の〈継子譚〉の骨格からはずれた〈反継子譚〉なる話型を考えていく必要があるだろう。

（おおくら ひろし 日本語日本文学科）